



写真-1 市川と駒ヶ岩（令和4年4月撮影）

■ 柳田國男が幼少期に遊んだ駒ヶ岩

写真-1 は、国道312号・神崎橋の北約300mの所にある「駒ヶ岩」を撮ったものです。福崎町が生んだ日本民俗学の創始者・柳田國男（やなぎたくにお）が、自らの人生を回顧した『故郷七十年』に、幼い頃の記憶として辻川付近の民俗に関わる話がたくさん語られていて、その中に以下のような市川の河童「駒ヶ岩の河太郎」の話が出てきます。

辻川（現・福崎町西田原）あたりでは河童はガタロというが、随分いたずらをするものであった。子供の頃に、市川で泳いでいるとお尻を抜かれるという話がよくあった。それが河童の特徴なわけで、私らの子供仲間でもその犠牲になったものが多かった。毎夏一人ぐらいは、尻を抜かれて水死した話を耳にしたものである。

市川の川っぶちに駒ヶ岩というのがある。今は小さくなって頭だけしか見えていないが、昔はすいぶん大きかった。高さ一丈（≒3m）もあったであろう。それから石の根方が水面から下へまた一丈ぐらいあって、蒼々（あおあ）とした淵になっていた。そこで子供がよく死ぬのである。私ももう少しで死にかかった経験がある。水が渦を巻いているので引き込まれるが、あわてないで、少しじっとしていると、流れのまにまに身体が運ばれ、浅瀬へ押し流されて、浮かび上がることができる。そこであまりバタバタすると、渦の底へ引きこまれてしまうのだった。鰻（うなぎ）のたくさんとれる所で、枝釣りをよくしたものであった。

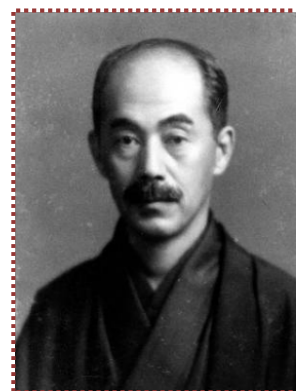


写真-2 柳田國男
（Wikipedia から引用）

最近の写真でみると、市川ペリの駒ヶ岩の頭がほんの少ししか見えなくなっている。岩の頭を欠いて火打石を採ったりしたため、小さくなったのもあろう。あるいは市川の流れが変わって岩が砂に蔽われたものか、子供のころの流れはもっと川幅が広がったことを憶えている。あの付近の人は今でもガタロがいていっているであろうか。

（『故郷七十年』－私の学問～駒ヶ岩の河太郎から～）

福崎町観光協会が平成 24（2012）年に駒ヶ岩近くに立てた「駒ヶ岩」説明板（写真-3）によると、「國男少年兄弟（國男は男ばかり 8 人兄弟の 6 男）は、夏になると、この岩の上で衣を脱いで、そばの淵で泳いだりウナギの枝釣りをして遊んだそうです。」ちょうど写真-4 のように……。



写真-3 駒ヶ岩とその説明板



写真-4 駒ヶ岩上で服を脱いで対岸で遊ぶ生徒たち

■ 駒ヶ岩の地質について

駒ヶ岩近くの説明板には、「神馬の蹄（ひづめ）跡」として、以下のような説明も記されています。

「辻川にある鈴の森神社の氏神である鈴の森明神が神馬に乗って駒ヶ岩から古宮に向かって跳んでいったと伝えられており、その際にできた蹄跡が残っていると言われています。」

岩の上には、半円形の馬蹄のような凹部があるとのこと、筆者も探してみましたがわかりませんでした。

駒ヶ岩は、ジュラ紀丹波層群の砂岩頁岩の互層です。砂岩優勢ですが、層厚 5～20cm で細かく互層になっている部分もあります。岩体全体、特に珪質の砂岩は緻密で硬く、このため長年にわたる市川の河食に耐えて、大きな岩体として横たわっています。

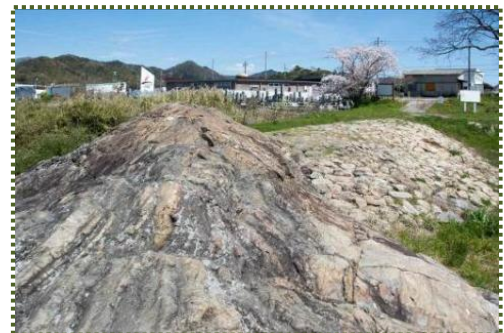


写真-5 砂岩頁岩の互層構造が見られる駒ヶ岩

■ 市川舟運の船着場に利用されていた駒ヶ岩

図-1 の平面図は、明治 24（1891）年から 26（1893）年頃に神東（じんとう）・神西（じんさい）郡役所の技手により作成されたものの一部で、「市川実測図・神東西郡全村組合備品」と上書きされた木箱に、市川の平面図・縦断図・横断図がセットで残されています。

これらの図面は、市川の治水計画作成を目的としたものといわれていて、当時の市川およびその周辺の状況を知ることができる貴重な資料です。

この平面図を見ると、①の箇所に市川の岸から駒ヶ岩に石積堤防が伸びているのがわかります。これは、高瀬舟の船着場で「湛保（たんぽ）」と呼ばれ、明治時代中期まで使用されていたそうです。「湛保」の周辺地は「浜倉」と呼ばれ、積み荷を集積・保管する倉庫が建っていたと伝えられています。

なお、この「馬の背」と呼ばれた石積堤防は、土砂に埋まりその上に不法投棄されていたのを、平成 26（2014）～27（2015）年度に県の福崎事業所が撤去し、土砂を取り除いて写真-6 のようにしたそうです。

市川に舟運が開かれたのは寛永 3（1626）年のことで、仁豊野村（にぶのむら：現・姫路市）の繁栄策の一つとして、姫路藩主・本多忠政によって高瀬舟 6 艘が認可されたのが始まりと言われています。

その後、数々の変遷を経て、寛延 3（1750）年に仁豊野村の舟株は 13 艘となりましたが、宝暦 5（1755）年にはそのうちの 2 艘が福崎村に、また 2 艘が甘地村（あまじむら）に売り渡されました。

高瀬舟には 3 t ほどの荷物を積載でき、下りは年貢米、材木、生野銀山産出の銀・銅などを積み、上りは塩や干鰯（ほしか）などを運んでいました。

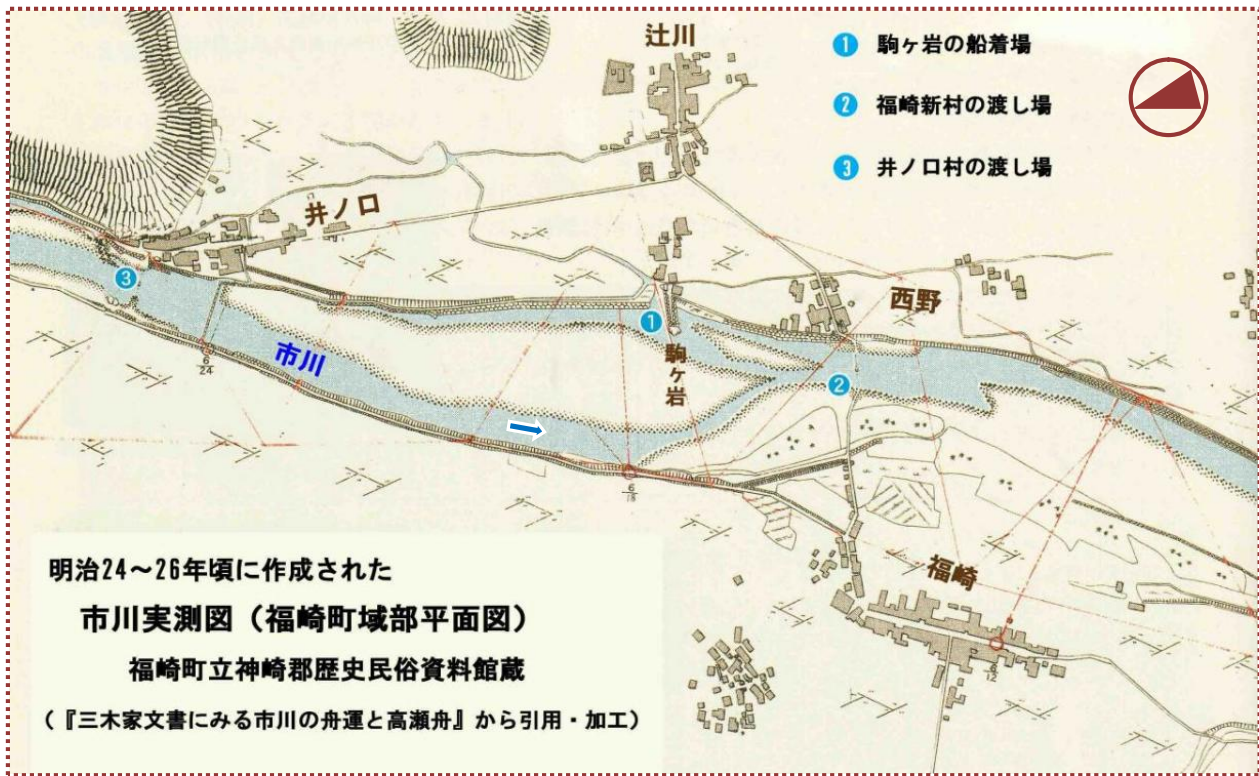


図-1 明治 24～26 年頃に作成された市川実測図

秋の収穫期になると、大庄屋である三木家※1には大量の年貢米が運び込まれます。年貢米は「向かい角」（南面道路を挟んで南側の作業用地）で俵に詰められ、「役所の間」で品質・重量の検査を済ませて米蔵へ運ばれます。蔵の天井まで積み上げられた米俵は実に壮観だったとか。後日、駒ヶ岩の船着場にて高瀬舟に積み込まれて飾磨津まで下り、そこで廻船に積み替えられて大坂へ送られて行ったそうです。

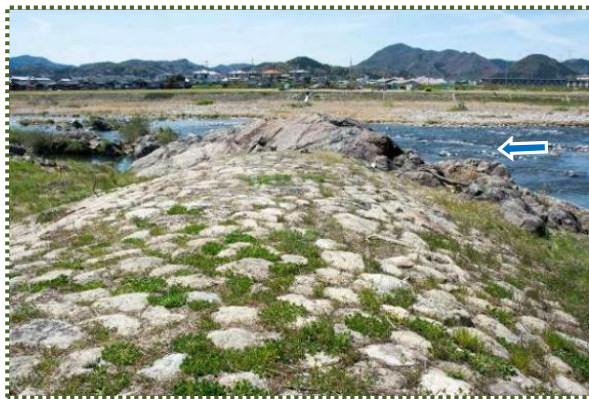


写真-6 駒ヶ岩の船着場跡



写真-7 大庄屋・三木家住宅（兵庫県指定重要有形文化財）

※1 三木家：三木家は英賀（あが）城主・三木通秋（みちあき）の子孫とされ、後に飾磨で飾磨津屋と称する酒屋を営んでいたが、明暦元（1655）年、姫路藩主・榊原忠次の新田開発の呼びかけに応じ、初代利通が辻川村へ移り住んだ。三代善政から八代通済まで、江戸時代を通じ、代々姫路藩の大庄屋を務め、地域の発展に大きく貢献した。幼少期より非凡な記憶力の持ち主だった松岡國男（後の柳田國男）は、明治 18（1885）年、11 歳の時に三木家に 1 年預けられ膨大な蔵書を読破、この時の読書体験が後に「日本民俗学の父」と呼ばれる柳田國男の源を育んだ。

なお、三木通秋は英賀三木氏九代目の当主。天正 6（1578）年、毛利氏と同盟を結んでいた通秋は、三木合戦の始まりを受けて海路を使って別所氏を積極的に支援し、援軍や兵糧を送っている。しかし、天正 8（1580）年 1 月に三木城が落城して別所長治が自害すると、英賀城も織田軍の猛攻を受けて陥落。通秋は子の安明ら一族とともに九州へと落ち延びた。天正 10（1582）年、羽柴秀吉に許されて英賀に戻り、かつてのような所領は失ったものの再び同地に居住して郷土頭となっている。



図-2 福崎町辻川付近の地図

■ 2ヶ所の渡し場跡に2つの橋が架かる

「市川実測図」によると、②の箇所に福崎新村の渡し場が、③の箇所に井ノ口村の渡し場がありました。現在、②の位置には神崎橋が架けられ、③の位置には月見橋（町道橋）が架けられています。

初代神崎橋は、明治 30（1897）年に架けられた木橋で、橋長 125 間（≒227m）、幅員 2 間（≒3.6m）です。架橋以前は渡しがありましたが、大雨毎に河留（かわどめ）となっていたそうです。

現在の神崎橋は、昭和 5（1930）年に架けられたもので、架橋後すでに 90 年以上が経過した高齢橋です。橋長は 157.4m（8 径間）、幅員は 5.4m、2 主桁のプレートガーダーによるゲルバー桁ですが、右岸高水敷部の 3 径間だけは RCT 桁となっています。これは、昭和 11（1936）年に加古川に架けられた大門橋も同様で、流水部が 3 径間の鉸桁橋、高水敷部が 4 径間の RCT 桁橋になっています。恐らく鉄不足が背景にあると思われます。

平成 20（2008）年度には落橋防止、耐震補強がなされています。また、昭和 43（1968）年、上流側に幅員 3m の歩道橋が併設されています。



写真-8 初代木橋の神崎橋
（『平成 18 年度特別展・福崎記』から引用）



写真-9 福崎大橋から神崎橋を撮影

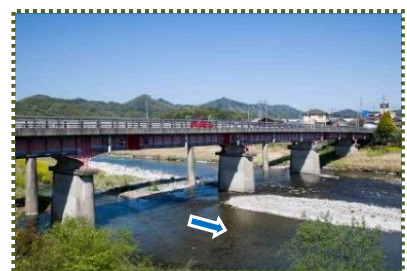


写真-10 神崎橋
（上流側には歩道橋が設けられている）

初代月見橋は吊り橋です。架橋時期は不明ですが、昭和 22（1947）年に米軍が撮影した空中写真に橋が写っているので、架けられたのはそれ以前と思われます。昭和 38（1963）年の洪水で被災し、その跡に現在の月見橋が昭和 41（1966）年に完成しています。現地には吊り橋左岸側の橋脚基礎が残っています。

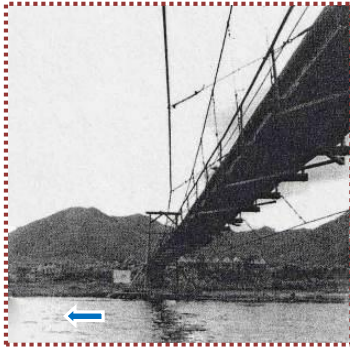


写真-11 初代月見橋
（『福崎記』から引用・加工）

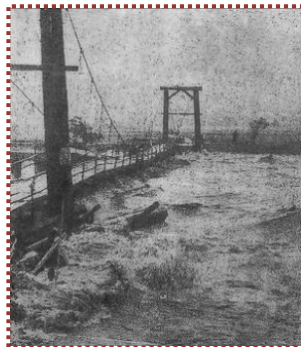


写真-12 昭和 38 年被災時の月見橋
（S38 広報「ふくさき」から引用）



写真-13 現在の月見橋

■ モノローグ

駒ヶ岩の船着場跡近くにはセンダンの巨木があり、少し南にある田嶋神社の境内にはムクノキの巨木があります。高瀬舟航行や渡しを目印になっていたのでしょうか。

そういえば加古川・国包の渡し跡の左岸にもセンダンの巨木があり、揖保川・正條の渡し跡にも数本のムクノキがありました。巨木は、夏のクソ暑い時は木陰を作ってくれるし、雨の時は雨宿りもできるし……。

トウダイグサ（燈台草）

トウダイグサ科トウダイグサ属の二年草。全草にわたり有毒である。日当たりのよい荒地や畑などに生える。草丈は 20cm から 30cm 程度。葉のつきかたに特徴があり、茎の中程の葉はへう型で互生するが、茎の頂部の葉は丸みの強いへう型の葉を 5 枚ずつ輪生する。茎の頂部からは放射状に花茎を伸ばす。花期は 4 月から 6 月で、碗状の苞葉の中に黄色い花を複数つけ、その黄色い花を燈火の皿に見立てたのが和名の由来。船の航行目標となる灯台ではない。駒ヶ岩近くのセンダンの巨木の足元に群生していた。



写真-14 トウダイグサ

【参考資料】

- 1 『神崎郡誌』 神崎郡教育会編集兼発行 昭和 17 年 5 月
- 2 『福崎町史・第二巻本文編Ⅱ』 福崎町 平成 7 年 3 月
- 3 『故郷七十年（新装版）』 柳田國男 平成元年 4 月
- 4 『駒ヶ岩』 福崎町観光協会 HP、地質岩石探訪 HP
<https://www.2u.biglobe.ne.jp/~HASSHI/komagaiwa.htm>
- 5 『三木家文書にみる市川の舟運と高瀬舟』 福崎町教育委員会 平成 29 年 10 月
- 6 『平成 18 年度特別展 福崎記 ふくさきの記憶』 福崎町立神崎郡歴史民俗資料館編
- 7 『柳田國男、三木通秋、トウダイグサ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 4（2022）年 10 月 『ひょうご水百景』No.158
改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』No.158